下関くじら物語

くじらと関わりのある、下関の施設・史跡・モニュメント・人物などを紹介します。

下関と鯨について　About Shimonoseki and the whaling

下関と鯨との関わりは古く、縄文時代後期の六連島遺跡、弥生時代前期の綾羅木郷遺跡、弥生時代中期の吉母浜遺跡、古墳時代の蓋井島遺跡等から鯨骨が出土しています。鯨骨の中には、ヘラ状をしているのもあり、アワビオコシ（アワビを岩から採取する時に使う道具）として使われていたのではないか、と推測されています。当時は、組織的に捕鯨を行っていたのではなく、寄り鯨（座礁して岸に打ち上げられた鯨）や流れ鯨（傷つくなどで漂流した鯨）を捕獲していたようです。

12世紀に入り平家物語の中で、壇ノ浦を舞台にしてイルカが登場します。中世の下関でもイルカは見られたようですが、山口県では1570年～1573年（元亀年間）に、北浦を中心とした長州捕鯨が始まります。下関では旧豊北町の島戸、和入、肥中、角島などで古式捕鯨が行われた形跡がありますが規模は長門の通、川尻に比べると規模が小さいものであったようです。下関の港町のある都市部では長州捕鯨による鯨肉・鯨油・鯨骨の流通・集散地となり、北前船を通じてこれらが各地に送られていました。（北前船の寄港地で中継地であった下関には、古くから鯨の食文化が発達し、正月・節分等に鯨を食べる食文化が残っています）長州藩は、長州捕鯨を積極的に奨励し、鯨運上銀の取り立てによる藩財政の強化を図っていました。下関には、鯨肉等を扱う諸方問屋（地方問屋）が置かれ、莫大な運上銀は倒幕資金に使われたともいわれています。

明治時代に日本の捕鯨技術を飛躍的に発展させた功労者である山口県出身の岡十郎はノルウェーに渡り、近代（ノルウェー式）捕鯨を学び、1899年（明治32年）山田桃作とともに長門市にノルウェー式捕鯨会社である日本遠洋漁業（株）、（後の日本水産）を設立し、出張所を下関に設置しました。（下関市の日和山公園に岡十郎と山田桃作の顕彰碑があります）これが日本の近代捕鯨の幕開けとなったのです。日本遠洋漁業（株）はその後、東洋漁業、東洋捕鯨、日本捕鯨と合併により名前が変わりましたが、日本国内での鯨肉集散拠点地の1つであった下関には支社、支店が置かれ、1934年（昭和9年）には、日本捕鯨を設立した岡司浩助の提唱により、南氷洋捕鯨が始まります。

一方、1922年（大正11年）下関に本拠地を置く林兼商店（後の大洋漁業）が捕鯨部を新設し、近海捕鯨に乗り出しました。その後、1936年（昭和11年）林兼商店の中部幾次郎が大洋捕鯨（株）を設立、翌12年から南氷洋捕鯨を開始します。昭和24年まで下関には大洋漁業の本社が置かれ、下関の林兼造船により捕鯨船が建造され、戦前、戦後を含めて南氷洋捕鯨の冷凍鯨肉の水揚げ地、鯨肉加工品の生産拠点、捕鯨船の基地として、関連産業とともに水産都市発展の一翼を捕鯨産業が担っていました。下関港港への鯨肉の水揚量は1958年（昭和33年）に1万トンを超え、昭和30年代後半から40年代にかけて鯨肉の水揚げがピークの2万トンに達しています。これは現在の調査捕鯨で得られる量の4倍以上にあたり、当時の賑わいぶりが想像できます。現在は閉鎖されていますが、下関長府外浦町の旧水族館の隣接地である関見台公園の一角に、1958年（昭和33年）に大洋漁業が建設・寄贈した「鯨館」（写真⑭）がありす。全長25mで内部は資料展示室になっていましたが、近代捕鯨の華やかりし下関を象徴するものとして、下関市民に親しまれています。

IWC（国際捕鯨委員会）で1986年からの商業捕鯨モラトリアム（一時停止）が採択され、1987年下関港に捕鯨船が帰港したのを最後に、下関は商業捕鯨基地としての役割を終えましたが、引き続き鯨類捕獲調査事業における、目視採集船の基地として現在に至っております。この間、1998年（平成10年）に調査母船「日新丸」の一般公開が行われたのに続き、同年11月には初めての南極海鯨類捕獲調査船団の合同出港式も実現しました。

2001年（平成13年）4月には新水族館「海響館」がオープンし、なかでもノルウェー国立ロムソ大学附属博物館から借り受けた、全長25mにも及ぶシロナガスクジラの骨格標本（写真⑨）は、国内では唯一、世界にも数体しかない大変貴重なもので、市内外から注目を集めています。また、翌2002年（平成14年）には第54回国際捕鯨委員会年次下関会合が開催されました。2005年には第4回日本伝統捕鯨地域サミットを関催、2007年より、下関市に寄贈された第二十五利丸の展示を行っていましたが、船体の老朽化のため解体し、新たに捕鯨箱等をモニュメントとして設置いたします。下関市は今後も鯨のまちとして世界へ向けて情報発信を続けます。

安徳天皇緑起絵図

林兼産業-親子鯨(昭和30年代)

出港式風景

①サンセイ:旧林兼造船(赤銅本町西)
主に大洋漁業の捕鯨船を建造した
(現在)いるのは解体された第二十五利丸

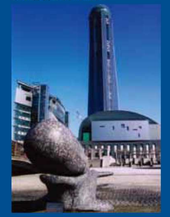
②林兼産業本社工場(大正町)
古くは屋上にネオンサインのクジラがあった

③まるは通り(竹崎町)

④旧大洋漁業株式会社本社ビル
(竹崎町)
昭和11年建築。現在は取り壊され、大洋漁業(株)本社跡地の2棟が建っています。

⑤林兼造船跡(赤銅日の出町)
昭和53年に閉鎖

⑥虹ふきくじら(豊前田町)
海峡ゆめ広場内にある鯨のモニュメント



⑦旧東洋捕鯨株式会社下関支店(神之町)
のちに日本捕鯨(株)など、変遷

⑧日和山公園:顕彰碑と胸像(唐戸中浜町)
日本遠洋漁業(株)を創設した岡十郎と山田桃作の顕彰碑

日本捕鯨株式会社の創立者国司浩助の胸像

⑨海響館(あるかぽーと)
シロナガスクジラ骨格標本

くじら模型

スナメリモニュメント

⑩旧秋田商会ビル(唐戸町)
木材から鯨まで扱っていた商社

⑪唐戸銀店街鯨の壁画(唐戸町)
東京大学デザイン学部の学生が描いた

⑫赤間神宮(阿弥陀寺町)
源平合戦で滅亡した安徳

⑬長府庭園(長府黄檗町)
旧坪倉邸・中根強次郎氏(明治)4年に本宅として購入

⑭鯨館(長府外浦町)
1958(昭和33)年に大洋漁業が建築し、下関市に寄贈

⑮捕鯨砲(長府外浦町)
鯨館そばに展示

⑯下関市立考古博物館
(大学建築ホ)
船骨製アワビオコシを展示

⑰捕鯨砲(永田本町東大学校内)
1987(昭和62)年に日本共同捕鯨から寄贈された捕鯨砲

⑱つのしま自然館(豊北町角島)
90年ぶりに鯨の解体ショーとして見せたクジラ(マッコウクジラの骨格標本)(レプリカ)を展示

下関くじら人物伝　People in Shimonoseki related to whale

日本初のノルウェー式捕鯨会社
日本遠洋漁業(株)の創立者　岡　十郎 明治3年(1870)～大正12年(1923)

岡十郎は、明治3年（1870）山口県阿武郡奈古（現・萩市）に西村利右衛門の五男として生まれた。慶應義塾を卒業した後、郷里で酒造業を継ぐかたわら、県議会議員などをつとめた。明治32年（1899）5月単身ノルウェーに渡り、近代捕鯨の導入に努め、同年7月2回、山田桃作らと共に「日本遠洋漁業株式会社」を創立する。同社は当時市仙崎に本社、下関市に出張所を置き、同年10月5日、日本初の国産鉄製捕鯨船「第一長門丸」を建造した。「日本遠洋漁業(株)」は、のちに「東洋漁業(株)」「東洋捕鯨(株)」に発展、そして現在の「日本水産」へとつながる。「長州捕鯨」の伝統をバックグランドに十郎らが目指した遠洋漁業は、4半世紀も経たずに捕鯨船団となって南氷洋に向かうことになる。

日本初のノルウェー式捕鯨会社
日本遠洋漁業(株)の創立者　山田　桃作 安政4年(1857)～大正4年(1915)

山田桃作は、安政4年（1857）大津郡浅田（現・長門市三隅下浅田）に生まれた。明治時代に入り捕鯨式捕鯨が流行をはじめると、親戚である岡十郎の影響を受け、捕鯨業の近代化を決えた。その後、仙崎で一つ捕鯨会社を起こして近海捕鯨に乗り出すが不調に終わる。しかし、ノルウェー式捕鯨法に衝撃を受けた桃作は、近代式捕鯨会社設立の急務を感じ、ノルウェーから帰国した岡十郎と「日本遠洋漁業株式会社」を創立。下関市岬之町三百目の海岸辺に出張所を開設、資金面を桃作が担当し、鯨油等の販売を開始した。後に「東洋捕鯨株式会社」となると、桃作は監査役に退き、東洋捕鯨（株）が捕獲した鯨肉を原料とする食料加工品や海産物を取扱う委託問屋「伊佐奈商会」を大阪で設立。桃作は、当時一般の嗜好に適さなかった鯨の赤肉を、今日の日本の鯨食文化へと高めた。大正3年（1914）東洋製水会社の重役に就任した桃作は、最後の大事業である製水会社の合併に取り掛かった。また長州鉄道（のち日本国有鉄道山陰本線）の創立、朝鮮勧農会社を創ろなど多くの会社設立に関与。また下関市の港湾改良委員として市の港湾改良発展にも尽くした。

日本捕鯨(株)の創立者　国司　浩助 明治20年(1887)～昭和13年(1938)

国司浩助は、明治20年（1887）兵庫県神戸市で出生。水産講習所（現・東京海洋大学）に学び、農商務省（現・農水省）から英国・カーディフに派遣され、英国屈指のトロール船のオーナー、ニール一族のもとでトロール技術を習得。明治44年（1911）若干24歳で、日本水産（株）の前身、田村汽船漁業部の主任として下関で汽船トロール漁業を始め、自ら漁船に乗り込み精力的に事業を拡大していった。また、直接魚を獲る仕事だけでなく、日本で最高の生産能力を持つちょう製造工場を建設、工場から出る魚の骨などを利用した肥料工場も建設した。さらに水産業の総合的な発展を願い水産研究所を設立。ディーゼルエンジン付きのトロール漁船や船内急速冷凍装置も開発し、世界中の漁場に出漁できる体制確立に貢献した。昭和9年（1934）国司は東洋捕鯨（株）と日本産業（株）を合併し日本捕鯨（株）を設立。社長として、母船式捕鯨事業として遠洋漁業の理想を具体化し、ノルウェーから岡南丸を購入、その活路を求め南氷洋に出漁。試験操業に確信を得て第二岡南丸を建造し、捕鯨王国としての日本の地位を築いた。昭和59年6月、国司浩助の業績をたたえた顕彰胸像が、下関市の日和山公園に建立された。（写真提供　日本水産株式会社）

大洋漁業(株)の創立者　中部　幾次郎 慶応2年(1866)～昭和21年(1946)

中部幾次郎は、慶応2年（1866）兵庫県明石郡林村に生まれた。林屋兼松という屋号で鮮魚の運搬や販売する家庭で育った幾次郎は、明治37年（1904）、大陸周辺の漁場開発をするため本拠地を下関に置き、大正2年（1913）大洋漁業株式会社の前身、林兼商店を竹崎町に開設した。林兼は、水産業種全てを直営するという方針のもと底引き網漁に着手、冷蔵運搬船や大型冷蔵施設を建設。さらに缶詰製造や漁具漁網の販売も進め、南氷洋捕鯨に参入していった。昭和11年（1936）、国内初の国産捕鯨母船「日新丸」と、処理のキッチャーボートを建造し、1,100頭余りの鯨を捕獲する。戦後、鯨肉は大切なタンパク源であるという考えから、中部は捕鯨の再開を連合軍総司令部に働きかけ、それを実現させた。昭和4年（1929）幾次郎から住宅の購入を任された長男謙吉は、下関市長府に広大な屋敷を求め本邸としたが、この屋敷は後に下関市が購入し、平成5年（1993）、長府庭園として開園している。

このリーフレットについての
お問合せは、下記のところまで。

下関市水産課
☎083-231-1273

〈写真提供〉
下関市
マルハニチロ(株)
日本水産(株)

クジラと下関の歴史絵巻

Shimonoseki & Whaling history picture scroll

下関港のキャッチャーボート(昭和61年頃)

旧下関大丸

みなと祭り(昭和20年頃)

下関漁港(昭和24年頃)

旧下関球場(昭和35年頃)

中部認での喜寿の宴

集結したトロール船(明治末年)

東洋捕鯨(株)下関支店

綾羅木郷遺跡発掘(昭和40年代)

海響館

林兼産業と鯨のネオンサイン(昭和30年代)

路面電車と水族館(昭和30年代)

戦後唐戸を出港した捕鯨船団の新聞記事

旧大洋漁業本社

在りし日の藤原義江

林兼商店社屋(大正時代)

西村宗四郎商店(明治末年)

安徳天皇緑起絵図

2000

2000年(平成13年) 鯨をイメージした外観を持つ新水族館海響館がオープン。ルウェートロムソ大学付属博物館から貸与された、シロナガスクジラの骨格標本が展示の目玉となる。

2002年(平成14年) IWC下関会議が開催される。引退した捕鯨船「第二十五利丸」が下関市に寄贈される。

2003年(平成15年) 4月、つのしま自然館開館。国立科学博物館からおくられたレプリカが恐竜の仲間とされるクジラ骨格標本展示。11月19日 新種鯨ツノシマクジラ英国科学雑誌ネイチャー(掲載1998年9月)に理載し鯨はヒゲ鯨類とは別の新種。学名は「クジラ研究の第一人者・大村秀雄さん敬称略)に捧ぐ」オムライ(初名は「ツノシマクジラ」と命名。

2005年(平成17年) 第4回日本伝統捕鯨地域サミットを下関で開催。寄贈された第二十五利丸を臨時に公開。

2007年(平成19年) 第二十五利丸の恒設展示を実施。

2010年(平成22年) 鯨類の持続的利用に関する会合を下関で開催。

2012年(平成24年) 6月、「全国鯨フォーラム2012下関」開催。

2015年(平成27年) 第二十五利丸を解体し、捕鯨砲等の部品をモニュメントとして設置予定。

1900

1993年(平成5年) 第12次調査は、大洋ミンク3日水2、操洋ミンク6日水2、大洋はシロナガス290頭、ナガス3、475頭、ザトウ98頭、イワシ972頭を捕獲。

1989年(平成11年) 3月、前年、南島海岸に埋蔵した鯨を掘り起こし、骨を細かく計測。国立科学博物館に寄贈。

1988年(平成10年) 9月11日 角島の漁船・和田宗松さんの漁船が鯨・体長1.5メートルと衝突。角島の海岸に引き上げ、解体のの空砲浜に埋め南米諸国捕鯨調査船団の来公開と、合同出港式を下関で行う。以後、継続して下関から出港。

1987年(昭和62年) 11月17日 クジラ料理レストラン日新料理長の岡本幸氏が、市の産業功労表彰を受ける。

1986年(昭和61年) 議を通じ「国際捕鯨方面で、陳情書を提出。

1985年(昭和60年) 4月19日 下関市議会で、捕鯨禁止の動きに対して捕鯨存続決

1984年(昭和59年) 6月、大洋漁業は社名を東洋水産と変更。

1983年(昭和58年) 大洋漁業、球団「大洋ホエールズ」を下関に結成。(現在の横浜DeNAベイスターズ)

1982年(昭和57年) 鯨の価格 生鮮魚介類小売価格四匁あたり「鯨赤身」切り身0.35円、鯨尾身切り身0.55円

1981年(昭和56年) 下関の歌「漁港恋し」に、鯨や、キッチャーボートが歌い込まれる。他に「しもせき小唄」(昭和33年)、「下関観光数え歌」(昭和37年)にも歌われる。

1976年(昭和51年) 11月 市立下関水族館が開館。水族館横の関見公園に昭和33年大洋漁業が鯨館を建築し、寄贈された(平成12年1月閉館)

1975年(昭和50年) 大洋はシロナガス290頭、ナガス3、475頭、ザトウ98頭、イワシ972頭を捕獲。

1974年(昭和49年) 捕鯨オリンピックで、日本が第一位になる。

1973年(昭和48年) 6月1日 午前10時45分ころ、関門海峡を3頭のクジラが西から東へ通る。

1972年(昭和47年) 8月2日に南氷洋出漁の許可が出る。10月に終戦後初めての南氷洋捕鯨出漁。大洋漁業の日新丸船団と日本水産の橋立丸船団の二船団であった。捕鯨実績は大洋668頭、日水400頭。

1971年(昭和46年) 8月2日に南氷洋出漁の許可が出る。10月に終戦後初めての南氷洋捕鯨出漁。大洋漁業の日新丸船団と日本水産の橋立丸船団の二船団であった。捕鯨実績は大洋668頭、日水400頭。

1970年(昭和45年) 3月、クジラを捕るために復員省(元海軍省)から、軍艦・輸送艦(戦後は特攻兵器の大本営輸送・戦後は700人の復員船)を借り受け、改造して小型捕鯨船とし、2月24日に下関の唐戸から出港した。3月1日から、小笠原島周辺で世界捕鯨史上初めての小型母船式操業を行った。

1969年(昭和44年) 6月、大洋漁業は社名を東洋水産と変更。

1966年(昭和41年) 岡十郎・山田英作の功績をたたえ、日和山公園に顕彰碑を建立。

1964年(昭和39年) 3月、クジラを捕るために、復員省(元海軍省)から、軍艦・輸送艦(戦後は特攻兵器の大本営輸送・戦後は700人の復員船)を借り受け、改造して小型捕鯨船とし、2月24日に下関の唐戸から出港した。3月1日から、小笠原島周辺で世界捕鯨史上初めての小型母船式操業を行った。

1963年(昭和38年) 下関出身の藤原義江が、クジラ捕りの歌、鯨をおさめて、を、昭和10年には、出版の港歌。

1962年(昭和37年) 林兼商店が捕鯨部を新設、士官捕鯨を員収し捕鯨事業へ進出。

1961年(昭和36年) 中部機次郎は、本拠地を下関にするにあたり、20万円の大金を長崎・男・鹿吉に貸し、住宅の購入を任せ、鹿吉は長府に広大な屋敷を15万円で求めた。(現在の長府庭園)

1959年(昭和34年) 捕鯨オリンピックで、日本が第一位になる。

1958年(昭和33年) 第12次調査は、大洋ミンク3日水2、操洋ミンク6日水2、大洋はシロナガス290頭、ナガス3、475頭、ザトウ98頭、イワシ972頭を捕獲。

1956年(昭和31年) 11月 市立下関水族館が開館。水族館横の関見公園に昭和33年大洋漁業が鯨館を建築し、寄贈された(平成12年1月閉館)

1955年(昭和30年) 鯨の価格 生鮮魚介類小売価格四匁あたり「鯨赤身」切り身0.35円、鯨尾身切り身0.55円

1954年(昭和29年) 6月、大洋漁業は社名を東洋水産と変更。

1953年(昭和28年) 3月、クジラを捕るために、復員省(元海軍省)から、軍艦・輸送艦(戦後は特攻兵器の大本営輸送・戦後は700人の復員船)を借り受け、改造して小型捕鯨船とし、2月24日に下関の唐戸から出港した。3月1日から、小笠原島周辺で世界捕鯨史上初めての小型母船式操業を行った。

1952年(昭和27年) 林兼商店が捕鯨部を新設、士官捕鯨を員収し捕鯨事業へ進出。

1951年(昭和26年) 下関出身の藤原義江が、クジラ捕りの歌、鯨をおさめて、を、昭和10年には、出版の港歌。

1950年(昭和25年) 鯨の価格 生鮮魚介類小売価格四匁あたり「鯨赤身」切り身0.35円、鯨尾身切り身0.55円

1949年(昭和24年) 6月、大洋漁業は社名を東洋水産と変更。

1948年(昭和23年) 8月2日に南氷洋出漁の許可が出る。10月に終戦後初めての南氷洋捕鯨出漁。大洋漁業の日新丸船団と日本水産の橋立丸船団の二船団であった。捕鯨実績は大洋668頭、日水400頭。

1947年(昭和22年) 4月 ザトウクジラ3頭が、イワシを追って関門海峡に入り込む。クジラの伊勢参りといった、当時、下関には、東洋捕鯨株式会社が創立し、新たに購入(米留中だった)キャッチャーボートが親子2頭を捕獲、厳流島に引帆し解体する。

1946年(昭和21年) この頃、松本清張の「わが半生の記」に、母の妹の主人が鯨のポテ売りをしながらこの辺まで来てよく店先で休んだ、とある。「ポテ売りは、天秤棒で売り歩くことで、当時、下関市場の浦町で現・みもすそ川町にたくさんいた漁夫のことをへ鯨を売りにきていたことがわかる。

1945年(昭和20年) 日本遠洋漁業株式会社(岬之町の西宗商店)内に出張所を置き、(のちに東洋捕鯨の出先所)以後、鯨・鯨油の生産・販売を西宗商店が引き受け、北海道九州・四国・朝鮮・満州・台湾と交易した。

1944年(昭和19年) 大洋漁業の創設者となる中部幾次郎が、下関に本拠を置く。

1943年(昭和18年) 秋田商会発行の「電信電話号」の中に「鯨・鯨肉・鯨油・鯨骨などの記載があり、取引商品のうちであったとが分る。秋田商会は、当時、清国の大連や、旅順、営口に支店があり、大陸へも鯨が渡っていた。

1942年(昭和17年) 東洋捕鯨株式会社を設立下関に支店を置いた。本社は大阪で、東京・福岡にも支店があり、鯨肉・鯨油などを販売し、捕鯨汽船の運営を所有。25か所に捕鯨の事業所を置き、年間、1000頭以上を捕獲した。

1941年(昭和16年) 4月 ザトウクジラ3頭が、イワシを追って関門海峡に入り込む。クジラの伊勢参りといった、当時、下関には、東洋捕鯨株式会社が創立し、新たに購入(米留中だった)キャッチャーボートが親子2頭を捕獲、厳流島に引帆し解体する。

1940年(昭和15年) 大洋漁業の創設者となる中部幾次郎が、下関に本拠を置く。

1939年(昭和14年) 音鯨町が鯨組十切尾羽毛組跡を扱った。

1938年(昭和13年) 4月6日 白石主部が妻の実家、現・北九州市小倉北区富野へ、鯨の尾羽毛五斤(約三キロ)を送る。

1937年(昭和12年) 1月 下関物品問屋の畠中吉蔵、神之町小西豊蔵、西南部町川崎助左衛門、西南部町・福島千蔵、東南部町が鯨皮鯨などを扱った。

1936年(昭和11年) 2月の問屋口競手約定に、鯨・鯨油・鯨骨類メ銀百目に付き五匁、鯨油大樽挺に付き、銀三匁、鯨皮物、銀百目に付き五匁とある。

1934年(昭和9年) 7月20日 品川弥次郎・福沢諭吉の出資により、ノルウェー式捕鯨を取り入れた日本遠洋漁業株式会社が設立。社長・山田桃作、常務・岡十郎・本社は山口県に出張所を下関におく。同年10月に第一長周丸が進水、のち、明治37年に東洋捕鯨となった。

1933年(昭和8年) 蓋井島・現下関市蓋井島・集落に神を迎え、神とともに共に食事をするという蓋井島・山の神神事の、大きかないにおよぼす、鯨の尾羽毛(一半斤・7.7文くじら油・4合・1.20文)の記録がある。

1932年(昭和7年) 下関にあった秋彦の出先機関・新地会所で、西市の大庄屋・野半左衛門が薩摩との交易支配人をする。交換品として、仙崎や川尻でとれた鯨の骨粉・粕・石炭・口ウ・米・塩などを薩摩に送り、藍玉・砂糖・たばこ・鯨節などが長州に入って来た。

1931年(昭和6年) 日本遠洋漁業株式会社(岬之町の西宗商店)内に出張所を置き、(のちに東洋捕鯨の出先所)以後、鯨・鯨油の生産・販売を西宗商店が引き受け、北海道九州・四国・朝鮮・満州・台湾と交易した。

1930年(昭和5年) 大洋漁業の創設者となる中部幾次郎が、下関に本拠を置く。

1929年(昭和4年) 中部幾次郎は、本拠地を下関にするにあたり、20万円の大金を長崎・男・鹿吉に貸し、住宅の購入を任せ、鹿吉は長府に広大な屋敷を15万円で求めた。(現在の長府庭園)

1926年(大正15年) 下関出身の藤原義江が、クジラ捕りの歌、鯨をおさめて、を、昭和10年には、出版の港歌。

1922年(大正11年) 林兼商店が捕鯨部を新設、士官捕鯨を員収し捕鯨事業へ進出。

1921年(大正10年) 本社は大阪で、東京・福岡にも支店があり、鯨肉・鯨油などを販売し、捕鯨汽船の運営を所有。25か所に捕鯨の事業所を置き、年間、1000頭以上を捕獲した。

1919年(大正8年) この頃、松本清張の「わが半生の記」に、母の妹の主人が鯨のポテ売りをしながらこの辺まで来てよく店先で休んだ、とある。「ポテ売りは、天秤棒で売り歩くことで、当時、下関市場の浦町で現・みもすそ川町にたくさんいた漁夫のことをへ鯨を売りにきていたことがわかる。

1917年(大正6年) 日本水産株式会社下関市岬之町32番地が5月7日登記。株主名簿に国司吉助取締役の一人の記載。

1916年(大正5年) 4月 ザトウクジラ3頭が、イワシを追って関門海峡に入り込む。クジラの伊勢参りといった、当時、下関には、東洋捕鯨株式会社が創立し、新たに購入(米留中だった)キャッチャーボートが親子2頭を捕獲、厳流島に引帆し解体する。

1914年(大正3年) 秋田商会発行の「電信電話号」の中に「鯨・鯨肉・鯨油・鯨骨などの記載があり、取引商品のうちであったとが分る。秋田商会は、当時、清国の大連や、旅順、営口に支店があり、大陸へも鯨が渡っていた。

1909年(明治42年) 東洋捕鯨株式会社を設立下関に支店を置いた。本社は大阪で、東京・福岡にも支店があり、鯨肉・鯨油などを販売し、捕鯨汽船の運営を所有。25か所に捕鯨の事業所を置き、年間、1000頭以上を捕獲した。

1907年(明治40年) 秋田商会発行の「電信電話号」の中に「鯨・鯨肉・鯨油・鯨骨などの記載があり、取引商品のうちであったとが分る。秋田商会は、当時、清国の大連や、旅順、営口に支店があり、大陸へも鯨が渡っていた。

1906年(明治39年) この頃、下関の鯨問屋町・崎助左衛門、西南部町・畠田周蔵商店・観音鯨町が鯨組十切尾羽毛組跡を扱った。

1904年(明治37年) 大洋漁業の創設者となる中部幾次郎が、下関に本拠を置く。

1903年(明治36年) 日本遠洋漁業株式会社(岬之町の西宗商店)内に出張所を置き、(のちに東洋捕鯨の出先所)以後、鯨・鯨油の生産・販売を西宗商店が引き受け、北海道九州・四国・朝鮮・満州・台湾と交易した。

1902年(明治35年) 7月20日 品川弥次郎・福沢諭吉の出資により、ノルウェー式捕鯨を取り入れた日本遠洋漁業株式会社が設立。社長・山田桃作、常務・岡十郎・本社は山口県に出張所を下関におく。同年10月に第一長周丸が進水、のち、明治37年に東洋捕鯨となった。

1900年(明治33年) 2月の問屋口競手約定に、鯨・鯨油・鯨骨類メ銀百目に付き五匁、鯨油大樽挺に付き、銀三匁、鯨皮物、銀百目に付き五匁とある。

1899年(明治32年) 1月 下関物品問屋の畠中吉蔵、神之町小西豊蔵、西南部町川崎助左衛門、西南部町・福島千蔵、東南部町が鯨皮鯨などを扱った。

1894年(明治27年) クジラ一本につき、400匁のこ上納銀で、税薄と府藩が200匁づつを取る。(薄が資金を融通していた)

1893年(明治26年) 3月 島ア浦・現下関市豊北町長戸・庄屋藤右衛門が、藩に資金の借用を申し出て、不漁で返済できないときのために下関奇座の興行許可を願いいる。

1892年(明治25年) 1月 蔵敬中使直定書に、鯨油・鯨博物・赤身・毛羽毛搬入・納屋物・尾羽毛類とあり、当時すでに商品として存在していた。

1890年(明治23年) 12月 肥前国の漂流民・田中の商用で、クジラ漁入港を行う。保証人として、赤間関問屋高屋卯兵衛をなる。

1888年(明治21年) 蓋井島・現下関市蓋井島・集落に神を迎え、神とともに共に食事をするという蓋井島・山の神神事の、大きかないにおよぼす、鯨の尾羽毛(一半斤・7.7文くじら油・4合・1.20文)の記録がある。

1886年(明治19年) 2月の問屋口競手約定に、鯨・鯨油・鯨骨類メ銀百目に付き五匁、鯨油大樽挺に付き、銀三匁、鯨皮物、銀百目に付き五匁とある。

1884年(明治17年) 1月 下関物品問屋の畠中吉蔵、神之町小西豊蔵、西南部町川崎助左衛門、西南部町・福島千蔵、東南部町が鯨皮鯨などを扱った。

1754年(宝暦4年) クジラ一本につき、400匁のこ上納銀で、税薄と府藩が200匁づつを取る。(薄が資金を融通していた)

1753年(宝暦3年) 3月 島ア浦・現下関市豊北町長戸・庄屋藤右衛門が、藩に資金の借用を申し出て、不漁で返済できないときのために下関奇座の興行許可を願いいる。

1779年(安永8年) 1月 蔵敬中使直定書に、鯨油・鯨博物・赤身・毛羽毛搬入・納屋物・尾羽毛類とあり、当時すでに商品として存在していた。

1756年(宝暦6年) 蓋井島・現下関市蓋井島・集落に神を迎え、神とともに共に食事をするという蓋井島・山の神神事の、大きかないにおよぼす、鯨の尾羽毛(一半斤・7.7文くじら油・4合・1.20文)の記録がある。

1739年(元文4年) 1月の問屋口競手約定に、鯨油大樽挺につき五匁分売の記述がある。(鯨油が下関で取引されていたことを示す)

1718年(享保4年) 3月14日 吉母・現下関市大字吉母と室津・現下関市豊浦町室津の境にクジラが流れ着き、所有をめぐって争いが起こり、絵図を根岸に吉母と決着する。

1500年代 蓋井島遺跡から鯨骨が出土

吉母時代 紀元前1400年～紀元前700年 吉母遺跡から鯨骨製のアワビオコシが出土

弥生時代 紀元前700年～紀元700年 綾羅木郷遺跡から鯨骨が出土

縄文時代 紀元前4000年～紀元前1000年 六連島遺跡から鯨骨が出土